

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520092

研究課題名(和文) 少年・少女雑誌にみる子供の生活と思想 戦後期の「笑い」投稿欄を基に

研究課題名(英文) Children's Life Styles and Thoughts seen in Boys' and Girls' Magazines

研究代表者

福井 直秀 (Fukui, Naohide)

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20115926

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦後10年間の少年雑誌の笑い投稿欄における投稿少年の制作状況、生活環境、文化的環境などについて聞き取り調査をした。

その結果、当時の投稿少年が、笑いの制作や投稿についてほとんど周囲からの影響を受けなかったこと、また、投稿少年を中心とした笑いを作ったり、投稿したりするグループの形成がなかったことが確認できた。彼らは遊びなど、その他の環境においては、周りの少年と同様の交際を続けていたが、笑いの制作・投稿については孤立していた。この点は、当初の予想と全く反するものであった。

研究成果の概要(英文)：Interview researches had been carried on over the producing process, living and cultural environment basing on the readers forum of Laughter Corner in Boys' magazines for the period of 10 years after the World War II. Through this research following points were made clear. It is found that the process of laughter producing and contributing articles were not influenced by surrounding people. Also, there were no evidences of formation of group of boys contributing laughter articles. The boys had certain exchanges with other boys, but in the process of producing and contributing articles, boys were all isolated. This phenomenon was an expected perspective.

研究分野：思想史、児童文学、教育学

キーワード：少年 笑い 制作 環境 戦後

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後の10年間程は、少年・少女雑誌において、読者が「笑い」に関する作品を投稿することが盛んであった。この場合の「笑い」とは、笑い話、トンチ問題、滑稽和歌、マンガ等を言う。盛んな様子は、当時の少年・少女雑誌のほぼすべてが笑い投稿欄を持っていたことから明らかである。このような投稿が一定の質と量を保って、多くの雑誌で続けられた。豊かな子ども文化の宝庫と言える。だが、彼らがどのような文化的環境の中で制作したか、彼らの制作の意図はどのようなものであったかなどの点に関する研究は全くと言っていいほど存在しなかった。また、当時の投稿少年は、ほとんどが70歳を超えている。このような中で彼らへのインタビューを急いで行う必要性があった。

2. 研究の目的

(1) 投稿少年の作品制作がどうして可能となったのか。この点について、彼らを指導した年長者や友人が存在したのか、あるいは、相互に影響を与え合うグループなどが存在したのかを探る。

(2) 投稿少年の創造を支えたものは何だったのかを明らかにする。

(3) 日本人が笑いをどう見て来たか、たとえば、許された空間でしか認められないものか、または創造的で推進すべきものと思ってきたかを庶民レベルで確認する作業の一端を担う。

(4) 現代的問題としては、子どもの創造力の養成へのあり方についてヒントが得られないか。

3. 研究の方法

当時の少年・少女雑誌には投稿者の氏名と共に住所が記載されているがあるので、姓が変わることが少ない少年を選び出し、当時の住所リストを作った。次いで、現在の住所

を探した。その後、現在の住所と氏名が一致する人々を電話帳で探した。それらの人に電話をかけ、協力していただける人を探し、ご自身の作品を送付した。その後、実際に会う、電話で答えていただく、文書を希望される方には手紙を差し上げるという3つの方法でインタビューした。

インタビューの項目は、生年月日、家族構成、両親の職業、雑誌への投稿の経緯、投稿についての周りの人たちからの影響、あるいは示唆など、雑誌の入手方法、雑誌の記事で印象に残るもの、当時の愛読書、笑いを作ることをどう思っていたか、学校、家、地域でどのように過ごしていたか(勉強、遊び、手伝いなど)、当時の関心事、得意な分野、少年時代の自分の特徴、成人後どんな職についたか、ご自分の人生にとって、投稿や読書などはどのような意味を持っていたか、その他、少年時代について印象に残っていることであった。

この際、質問を誘導することはしなかった。したがって、たとえば、賞品が投稿動機のある部分を占めていたとしても、本人が表明しない限り明らかにはなっていない。

4. 研究成果

(1) 前提となる調査

当時の雑誌に住所と名前が載っていて、かつ図書館で複写が許された資料を基に抽出したのは、『少年クラブ』1044人、『少年』268人、その他『小学六年生』、『小学五年』、『小学六年の学習』、『中学コース』、『中学時代』、『中学時代二年』、『中学時代三年』、『中学生の友一年』、『中学生の友二年』、『中学生の友三年』、『中学生生活』、『少年世界』、『少年少女の広場』、『おもしろブック』、『こだまブック』、『冒険王』、『太陽少年』の合計324人、総計1636人であった。

このうち、現在の住所が類推でき、おそらくこの電話番号ではないかと思われたのが、

156人であった。これらの人に対して順に電話していったが、現在使われていない、何度か電話しても出られない、投稿した本人ではない、既に死亡している、記憶にない、調査の趣旨に賛同してもらえない、等があり、最終的には、25人から聞き取りが出来た。

電話する曜日を変えて何度かしても出られない大きな理由として、詐欺などが横行し、知らない人からの電話を警戒する風潮の存在があり、この種の調査の難しさを痛感させられた。また、誌上に名前が載り、賞品も与えられるという一見喜ばしいと思える事実でも、記憶されていないことが多く、少年時代の体験について各人がもつ意味の差について、考えさせられた。

(2) アンケート項目別の結果と考察

次に質問した項目別に回答を挙げ、考察していく。

生年月日、家族構成、両親の職業。

これについては、他の項目との関係の中で述べる。

雑誌への投稿の経緯、および、投稿についての周りの人たちからの影響、あるいは示唆など。

当時の投稿少年は、ほとんどと言っていいほど、笑いの制作や投稿について周囲からの影響を受けていなかった。また、投稿少年を中心とした笑いを作ったり、投稿したりするグループも形成されていなかった。まず、周りからの影響である。想定される影響を与えた人たちとして、親、兄弟、年長・同年齢の友人がある。だが、これらを指摘した人は誰もなかった。ただ、雑誌を読んで自分も出れると思ったからというばかりであった。

回答を断った中に、自分の制作ではない、すなわち他の雑誌の作品を盗用したという人、また友人が自分の名前を借用したのではないかという人も、各一人存在した。

投稿を促したのものとして、バッジ、カード、えんぴつ、しおりなどの景品を挙げる例も何

件が存在した。この点は、明治、大正期の投稿で確認されているのと同様である。

雑誌の入手方法

この点は、予想されることだが、親の経済状態と関係する。比較的裕福だと買い与えられ、苦しいと自分で手に入れざるを得ない。親は貧しかったが、無理して雑誌を買ってくれたという人は一人いた。自分で手に入れたという場合は、家業の手伝いをして小遣いを得た、自分でニワトリを育て卵を売った、山で野鳥をとらえて売った、など金銭を得る「仕事」を通してというのがほとんどだった。また、雑誌は時に回し読みされたが、所有者は投稿者本人であった。

雑誌の記事で印象に残るもの、および、当時の愛読書

この点については、まとめて列挙する。

作家は、手塚治虫、福井英一、馬場のぼる、小松崎茂、江戸川乱歩、山岡荘八、やなせたかし、佐藤紅緑、サトーハチロー、高柳暉、海野重蔵、南洋一郎、山川惣司、樺島勝一、山中峯太郎、吉川英治が挙げられた。このうち、手塚治虫は圧倒的に人気が高かった。

作品は、「イガグリくん」、「鉄腕アトム」、「フクちゃん」、「サザエさん」、「ジャングル・ブック」、「南海の快男児」、「次郎物語」、「少年探偵団」、「冒険少年」、「のらくろ」、「猿飛佐助」、「くらま天狗」、「ほえる密林」、「少年王者」、偉人の伝記があった。

この他、ラジオ番組についても、「赤胴鈴の助」、「笛吹童子」など当時流行っていた番組を熱心に来たというのもいくつかあった。

漫画などの笑いを求めるものが必ずしも中心ではなく、冒険小説など当時の多くの少年が読んだものが多いようである。

笑いを作ることをどう思っていたか、

この点については、聞き取りに答えてくださるということは、自らの子ども時代を肯定的にとらえているということの意味するので(断られた中に、「思い出したくな

い」という答えが1件あった。「記憶にない」という答えが多かったが、それは「記憶すべき肯定的な時代ではなかった」を含んでいると考えられる。全体を考える指標になるのかという問題をもつという前提の上で考えるべきである。

だが、ほとんどが、「楽しみだった」、「好きだった」という回答であった。具体的には、「頭をひねる楽しさ」、手伝いなどが苦しかったので「息抜き」、友人関係の面倒さを逃れる「逃避」、「小心者の反動」(これは熟考された答である)が挙げられた。その他、「深い理由はない」「特に答えない」があり、軽い気持ちで応募した人たちも一定数いることが分かった。

学校、家、地域でどのように過ごしていたか(勉強、遊び、手伝いなど)

勉強については、ほとんどしなかった、しなくても出来た、国語、図画、歴史などが好きだった、に分かれた。投稿自体、文章を書くこと、あるいは絵を描くこと(漫画の場合)であるので、学校での勉学での国語、図画と重なる人たちと、学業は適当にして、余暇として投稿をしたという人たちの2種類があったように見受けられる。

遊びは、野球(道具を作りながらの)、野山で遊ぶ、虫取り、魚取り、チャンバラごっこ、ターザンごっこ、などである。

手伝いは、家業の手伝いがほとんどだった。

投稿少年が特別の存在ではなく、一般的な生活を送っていたと言える。

当時の関心事、得意な分野、少年時代の自分の特徴

少年時代の生き方については、2つに分かれた。社会的関心が高かった、物事を突き詰めようとしたなどと他の少年より意識的に生きていたというタイプの人と、普通の少年だった、おとなしかった、遊んでばかりだったというタイプがあった。

また、笑いについても、笑わせようとして

いたや、時々冗談を言ったりしたというタイプと自分では作っても特に人前で披露しなかったというタイプに分かれた。

少年時代の生き方と笑いを取るということのタイプは必ずしも重ならなかった。

成人後どんな職についたか。

これについては、次の問を引き出すものであるので、叙述しない。

ご自分の人生にとって、投稿や読書などどのような意味を持っていたか。

この問への答は、積極的な意味を持っていたと答えられた人と、ことさら答えない人に分かれた。前者は、社会へ出てから、人とのコミュニケーションの取り方や、様々な文章を書くときの助けになったなどであった。こう答えた人たちは、自分の中で笑いや少年時代の体験が生きていると認識して、今でも社会参加したり、社会の現実への意見を明らかにしたりしている。投稿が当人の人生にとって積極的な意味を持っていたのである。

まとめ

投稿少年に影響を与える周囲、あるいはグループが存在したのではないかとの当初の予想は当たらなかった。彼等は、雑誌からのみ影響を受けたと認識していた。だが、笑いそのものについては、友人の中で発信していたりして、決して隠されていたわけではなかった。

雑誌への投稿文化は、媒体がマス・メディアとはいえ、掲載に関心ある子どもにしか伝わらないため、その中でしか広がりを持ちえなかったようである。

このことは、並行して研究した、「明治末から大正期にかけての少年・少女雑誌の投稿欄における『とんち・奇抜問答』」における笑いについての投稿欄が、読者の日常などを報告する投稿欄に取り上げられていない、すなわち笑いの投稿欄が独立していることから推測される。笑いの制作が子どもたちに

とって広がりを持つためには、テレビというマス・メディアが必要だったと思われる。

なお、子どもの創造的な制作を促す方策の一つとして、自分でも作れるとの思いを抱けるような先行作品の提示が有効であるといえる。

今後の課題を最後に挙げる。

1 補足的な質問の設定。当時笑うことが好ましいと思われていたか、あるいは制限すべきと思われていたか。これについては、投稿者、およびそれ以外の人にも広く行う。

2 投稿作品の分析から、子どもの求めた笑いの質の分析を行う。

3 少年・少女雑誌掲載の大人の作った笑いの分析から、子どもの笑いへの影響・浸透を考察する。

拙稿「明治末から大正期にかけての少年・少女雑誌の投稿欄における『とんち・奇抜問答』」(『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第28号 2015年)参照

5. 主な雑誌論文等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

福井 直秀 (FUKUI Naohide)

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20115926

(2)研究分担者

齋藤 尚志 (SAITOH Hisashi)

夙川学院短期大学・幼児教育学科・准教授

研究者番号：70572866
